

Tsuji no nishi

辻の西遺跡 (第3次調査)

ふくおかけん や め し よ し だ あ ぎ つ じ

福岡県八女市吉田字辻所在の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第80集

2007

八女市教育委員会

序

八女市の北西部、八女丘陵を中心とした周辺地域には数多くの弥生時代、及び、古墳時代の遺跡が所在しています。

八女丘陵における文化財的調査の歴史は古く、江戸時代後期の久留米藩の藩学者 矢野一貞の記した「筑後将士軍談」が有名です。一貞は八女丘陵上に所在する主だった古墳を調査し、当時の状況を挿絵をも交えて克明に記しています。特に、今ではほとんど定説となっていますが、当時は誰も考えすら及ばなかった「岩戸山古墳 磐井墳墓説」を古文獻と考古学的所見を整合させて論じた功績は、今も輝きを失ってはいません。

その後も先人達の努力により幾度となく調査・研究が行われ、現在に至りましては、ほぼ台地全域に遺跡が広がっている事が分ってまいりました。

しかし近年、市内の各種開発は中心域の商業地だけではなく、市北西部の当丘陵周辺にまで押し寄せて来ており、遺跡群を取り巻く環境が慌ただしくなってきました。

貴重な文化遺産である遺跡を、地権者の方々の努力と御理解のみで現状を保存してゆくのは非常に困難な事であり、八女市教育委員会では現在、事業地における事前発掘調査を行い、遺跡を記録として保存し、後世に伝えていく発掘調査事業を継続して行っています。

今回、発掘調査を実施した辻の西遺跡（第3次調査）は過去2回発掘調査を行った周知の遺跡であり、今回の調査地もその西側隣接地でありましたので発掘調査を行わせて頂きました。

詳細な経過や調査結果の内容につきましては本文の項に譲りますが、予想通りの成果がありました。その成果を一冊の冊子としてまとめるにあたり、本報告書が当該遺跡、そして八女市にある全ての文化財に対する、愛護の心を育む一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本発掘調査に際し格段のご協力とご理解をいただきました 医療法人柳育会 理事長 柳 東 様をはじめ、八女リハビリ病院・老人保健施設グリーンビュー希望ヶ丘の関係者各位、そして地元吉田の皆様には並々ならぬご理解と心からの応援を戴きました。

深く御礼を申し上げますとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月31日

八女市教育委員会

教育長 中島清志

例 言

- 1 本書は八女市教育委員会が、医療法人柳育会 理事長 柳 東 氏より委託を受けて八女市教育委員会が実施した八女市吉田字辻に所在する弥生時代後期から終末を中心とした辻の西遺跡（第3次調査）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり実施した。又、発掘現場における調査は17年度（第3次調査）に行い、整理作業及び報告書作成については平成18年度に一括して行った。
- 3 発掘調査で検出した各遺構は、その種類毎に記号を付し、竪穴式住居、掘立柱建物をSB、溝状遺構をSD、土壌をSK、ピットをSP、方形周溝墓をST、不明遺構をSXと表記した。
- 4 本書に使用した測量図の作成は国土地理院の設定する第Ⅱ座標系を基準とし、大塚を中心に参加者で分担して行った。各種測量図の浄書、及び、出土遺物の実測図作成・浄書は岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した写真は、遺構については現地で大塚が撮影し、出土遺物の撮影においては筑後市教育委員会の協力を仰ぎながら大塚が行った。
- 6 本書使用の標高は海拔高であり、方位は全て磁北である。本地域における真北との偏差は約 $6^{\circ}10'$ である。
- 7 本書の執筆、及び、編集は大塚が担当した。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は、現在八女市の岩戸山歴史資料館において保管、収蔵している。

本文目次

I 調査の経過	1
II 遺跡の立地と歴史的環境	3
III 調査の内容	6
1. 調査経過	6
2. 検出遺構	6
a) 竪穴式住居	6
b) 掘立柱建物	15
c) 方形周溝墓群	15
d) 土壌	19
e) その他 (SX)	20
IV 出土遺物	21
V まとめ	30

挿図目次

第 1 図	辻の西遺跡位置図と周辺の遺跡 [1/25, 000]	4
第 2 図	辻の西遺跡第 1～3 次調査位置図 [1/2, 500]	7
第 3 図	辻の西遺跡第 3 次調査 遺構配置図 [1/250]	
第 4 図	1 号竪穴式住居 実測図 [1/60]	8
第 5 図	1 号竪穴式住居 土層断面実測図 [1/60]	8
第 6 図	2 号竪穴式住居 実測図 [1/60]	8
第 7 図	3 号竪穴式住居 実測図 [1/60]	9
第 8 図	3 号竪穴式住居 土層断面実測図 [1/60]	9
第 9 図	4 号竪穴式住居 実測図 [1/60]	9
第 10 図	4 号竪穴式住居 土層断面実測図 [1/60]	9
第 11 図	5 号竪穴式住居 実測図 [1/60]	11
第 12 図	5 号竪穴式住居 (建物) 土層断面実測図 [1/60]	11
第 13 図	6 号竪穴式住居 実測図 [1/60]	11
第 14 図	6 号竪穴式住居 土層断面実測図 [1/60]	11
第 15 図	7 号竪穴式住居 (建物) 実測図 [1/60]	12
第 16 図	8 号竪穴式住居 実測図 [1/60]	12
第 17 図	11 号竪穴式住居 実測図 [1/60]	13
第 18 図	12 号竪穴式住居 実測図 [1/60]	13
第 19 図	13 号竪穴式住居 実測図 [1/60]	14
第 20 図	9 号掘立柱建物 実測図 [1/40]	14
第 21 図	10 号掘立柱建物 実測図 [1/40]	15
第 22 図	1 号・5 号方形周溝墓 実測図 [1/120]	16
第 23 図	1 号方形周溝墓内 石蓋土壌墓実測図 [1/20]	16

第24図	1号方形周溝墓内 木蓋土墳墓実測図〔1/40〕	17
第25図	2号・3号方形周溝墓 実測図〔1/80〕	17
第26図	3号方形周溝墓内 合口式甕棺墓実測図〔1/20〕	18
第27図	6号方形周溝墓 実測図〔1/80〕	18
第28図	6号方形周溝墓内 石棺墓実測図〔1/20〕	19
第29図	1号土墳 実測図〔1/60〕	20
第30図	2号土墳 実測図〔1/60〕	20
第31図	3号・4号土墳 実測図〔1/60〕	20
第32図	5号土墳 実測図〔1/60〕	20
第33図	1号被熱ピット 土層断面、及び、平面実測図〔1/30〕	20
第34図	1号被熱ピット 完掘後断面見透し、及び、平面実測図〔1/30〕	20
第35図	出土遺物 実測図〔1/4〕	22
第36図	出土遺物 実測図〔1/4〕	23
第37図	出土遺物 実測図〔1/4〕	24
第38図	出土遺物 実測図〔1/4〕	25
第39図	出土遺物 実測図〔1/4〕	26

図 版 目 次

PL 1~PL 11	辻の西遺跡第3次調査 現地調査状況
PL 12~PL 16	辻の西遺跡第3次調査 出土遺物

表 目 次

第1表	辻の西遺跡第3次調査 出土石器観察表	27
第2表	辻の西遺跡第3次調査 出土石器観察表	29

I 調査の経過

1 調査に至る経過

八女市の北西部に位置する八女台地（以下、八女丘陵）上は、前方後円墳である岩戸山古墳や乗場古墳をはじめ、八女市内でも古墳時代に築造された古墳の密集度が高い地域として、かねてから考古学に興味ある方々から注目の的であった。

丘陵上を除く周辺地域では店舗や工場の建設、住宅の建築、農地開発などの事業が進み、これらを原因とした発掘調査が行われた結果、当該地域の古代における実態がわずかながら把握出来るようになった。

しかしながら、開発の波は結果的に古代の痕跡を徐々に狭めて行く事となり、その影響は近年八女丘陵本体に及びつつあることが予測されるようになった。

今回の調査の発端は、現在八女リハビリ病院・老人保健施設グリーンビュー希望ヶ丘として稼働している両施設に来訪される施設利用者の増加に伴う駐車場確保の為であり、施設西側の区画に駐車場を新規に増設し施設利用者の要望に答えるべく措置であった。

平成17年 5月23日付けにおいて個人の地権者、及び、医療法人 柳育会 理事長 柳 東 氏より駐車場新築工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の確認調査の依頼（17八生文第49・50号）が提出された。

確認調査の結果、当該地において埋蔵文化財の包蔵が認められた為、八女市教育委員会では、ただちに今後の対応について事業者と協議を行った。事業者に対し、工事予定対象地には数多くの遺跡が存在している事、対象地の東隣接地は昭和63年時の発掘調査の折、多くの遺構・遺物が確認された事等を伝え、その保存対策等について随時協議する事となった。

上記に基づき平成17年 7月21日付けにより、医療法人 柳育会 理事長 柳 東 氏より駐車場新築工事に伴う周知の埋蔵文化財包蔵地の発掘の届出（17八生文第128号）が提出された。

その結果、八女市教育委員会が予定地区の発掘調査を行い遺跡の記録保存を行いたい旨、事業者に伝えた。

その後、双方の協議過程において平成17年10月18日付けで埋蔵文化財発掘・整理調査に係る委託契約書を交わし、平成17年11月から平成18年 3月30日まで現地において発掘調査を行った。

発掘調査終了の翌年度において、平成18年 9月29日付けにおいて埋蔵文化財整理調査に係る委託契約書を交わし、八女市教育委員会が整理調査事業主体者となり整理事業に着手した。

発掘・整理調査における体制は以下の通りである。

2 調査体制

〔工事事業主体〕

医療法人 柳育会 理事長 柳 東

〔調査主体〕

八女市教育委員会

〔平成17年度〕

教 育 長	中島 清志
生涯学習課長	下川 文比古
同課長補佐	古庄 龍美
文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治（発掘調査担当）

【平成18年度】(平成18年9月まで)

教 育 長	中 島 清志
生涯学習課長	大津山 篤 (兼学校教育課長)
同課長補佐	古 庄 龍美
文化財係長	赤 崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治 (整理調査担当)

【平成18年度】(平成18年10月から。旧上陽町との合併による)

教 育 長	中 島 清志
社会教育課長	飯 田 せつ子
同課長補佐	松 崎 保元
文化財係長	赤 崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治 (整理調査担当)

調査作業 (五十音順)

浅田広子、浅田身鈴途、石井 勇、江上ヤヨイ、大塚啓子、桑原金代、柴田雪代、末吉理恵、田島和代、谷川義則、月足まつみ、鶴賀久博、野田早百合、樋口典也、松崎仁利、御手洗清香、山口ウタ子、

整理作業 (五十音順)

大塚啓子、金納イツエ、平島昌美、御手洗清香

なお、発掘調査にあたり、医療法人柳育会 理事長 柳 東 様からは調査中に多大なる御援助・御協力を賜りました。また、辻の西遺跡周辺に御在住の方々、そして地域の住民の方々には多大なるご配慮とご理解を賜り、本調査に対し暖かいご声援を載しました。紙面上で恐縮とは存じますが、御礼申し上げます。

また、以下の方々や諸機関には発掘調査、及び、整理調査において並々ならぬ御指導・御教示・御協力をお受けいたしました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

(順不同、敬称略)

池辺元明、伊崎俊秋、小池史哲、齋部麻矢、久野隆志 (福岡県教育委員会)

佐々木四十臣 (福岡県文化財保護指導委員)

永見秀徳、小林勇作、上村英士 (筑後市教育委員会)、尾崎源太郎 (広川町教育委員会)

熊本大学 埋蔵文化財調査室の檀 佳克氏には辻の西遺跡 (第3次調査) 出土品である古式土師器の観察に関し、御指導・御教示をいただきました。また、本遺跡に係るその他の事項に関しても多大な御尽力を賜りました。心より謝意を表します。

II 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は福岡県の南部に位置し、西に筑後市、東に上陽町（平成18年10月1日 八女市と合併）、黒木町、北に広川町、南に立花町、みやま市と2市3町と境を接し、主に農業を基幹産業としている。その立地は、耳縄山地南緩斜面より西方に延びる八女台地（八女丘陵）と、福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、釈迦岳山地に源を発し、黒木盆地を経て平野部を西流する矢部川によって形成された扇状地上にある。

辻の西遺跡は八女市の北西部に位置する吉田地区にあり、先述した八女丘陵の中央部やや東寄り付近に位置している。この近辺の丘陵部は北側直下を西流する広川の侵食作用で一部絶壁状となっており、八女丘陵で最も南北幅が狭くなり断面形は馬の背状にやや鋭角気味となっている。立地が丘陵頂部の為、四方への眺望は非常に良好で、北方側では久留米市上津町付近が肉眼で容易に視認出来、西方側では石人山古墳をはじめ岩戸山古墳などの古墳を見渡す事が出来る。南側に目を転じると、眼下には旧矢部川の河川跡が東西に見る事が出来、田園を挟み八女市・立花町の中心街を越えた所に八女地方のランドマークである飛形山の全景を見る事が出来る。

交通事情に目を移すと、当地の西500mに八女丘陵を南北方向に貫く国道3号線があり、現在でも九州の大動脈として機能している。しかし、辻の西遺跡周辺は隣接地に福岡県立 福岡高校が所在する事からも分かるように、国道とは距離も比高差もあり、その影響を微塵も感じさせない閑静な地域となっている。

【歴史的環境】

辻の西遺跡（第3次調査）は八女市吉田字辻に所在する弥生時代末～古墳時代初期を中心とした集落・墳墓遺跡である。総数300基以上の古墳が内在し、古代九州の大家族「筑紫君」の奥津城と言われる八女古墳群中の地理的な中央部分に位置しており、遺跡の西には岩戸山古墳や乗場古墳、東には善蔵塚古墳や鶴見山古墳等の大型前方後円墳が鎮座しており、それら大型古墳は堂々たる威容を放ち周囲の古墳群を圧倒している。

昭和60年代前半まで八女古墳群における始源と系列は、5世紀前半から6世紀後半まで比較的に明確な系列を成していると評価されていた首長墓群であったが、昭和63年の辻の西遺跡（第1次調査）発掘調査の成果により、八女丘陵上に前方後円墳が発生する前段階の状況が明らかとなり、また、近年の前方後円墳の確認調査事業により首長墓の複数系列が6世紀中頃を中心に発生している事が予測されるようになった。

ここでは、最近の調査事例を加味した上で、若干ではあるが八女古墳群を含めた周辺の歴史的環境の概要について略記したい。

八女丘陵上では4世紀前半頃から方形周溝墓や小円墳が造られるようになる。市内においては辻の西遺跡第1・2次調査や立山山古墳群が挙げられ、比較的小さな墓域の中で造墓活動を行っている事がわかる。

平野部に目を転じると、八女丘陵南部の扇状地上で西原遺跡や熊野遺跡（1次調査）等の弥生時代後半期に該当する甕棺墓群、石棺墓群、土壊墓群が展開し、その直後に畿内系の方形周溝墓が在地に楔を打ち込むかのように群形成し展開している。また、平田・六反田遺跡では広義の「豪族居館」⁽¹⁾と呼ばれる断面三角形の方形周溝（コーナー部分を含む検出長は約50m）が発見されている。全体形の30%程の検出であり、溝内側の様子の全てを伺い知る事は出来ないが、全国に発見例が知られる古墳時代前・中期に位置付けられる狭義の「豪族居館」の一部内容⁽²⁾を包蔵している事も予測され、八女丘陵上に展開する4世紀代の墳墓群形成と、こうした「居館跡」との結びつきや機能的性格が解明出来る可能性もある。

八女古墳群中の首長墓系列の初現は広川町・筑後市に跨る石人山古墳（墳丘長108m）である。美道



第1図 辻の西遺跡位置図と周辺の遺跡 (1/25,000)

- 1.岩戸山古墳 2.乗場古墳 3.福島高校遺跡 4.長峰地区条里 5.宅間田遺跡 6.善蔵塚古墳 7.茶臼塚古墳
- 8.丸山塚古墳 9.鶴見山古墳 10.鶴見山南・大神宮古墳 11~15.釘崎古墳群 16.鹿子島山古墳群 17.立山山壇輪窯跡
- 18.本古墳群 19.岩崎遺跡 20.円墳 21.福島中学校庭遺跡 22.口ノ坪遺跡 23.西原遺跡
- 24.野内遺跡 25.平田・六反田遺跡 26.北ノ前遺跡 27.福島地区条里 28.万上田遺跡 29.赤氏遺跡
- 30.熊野遺跡 31.鈍土羅石棺・本町遺跡 32.後ノ江遺跡 33.津ノ江遺跡 34.福島城跡 35.辻の西遺跡
- 36.神奈無田古墳 37.道手遺跡 38.餅田遺跡 39.枕林遺跡 40.丁ノ坪遺跡

部が短く玄門間口が狭い初期横穴式石室を内部主体に持ち、石室内には妻入の家形石棺を古墳主軸線上に安置する。棺蓋の屋根外面及び妻側には直弧文が浮き彫りされている。石室や石棺の形態、出土した初期須恵器から古墳築造時期は5世紀前半～中頃に比定され、後円部と前方部の境には、被葬者を守護するかのよう前方部を向いた武装石人が樹立している。石人山古墳が筑紫君磐井の祖父の墓だとも言われているのである。

5世紀後半になると、八女古墳群中から大型前方後円墳が見られなくなるが、久留米市南部地区の高良内・上津町周辺に浦山古墳(墳丘長約88m 帆立貝形)や石櫃山古墳(墳丘長100～115m 前方後円墳)等の大型前方後円墳が出現する。同じ頃、丘陵上では瑞王寺古墳(直径26m 円墳)、欠塚古墳(墳丘長45m 前方後円墳)、本6号墳(直径41m 円墳)、釘崎2号古墳(墳丘長47m 前方後円墳)、丸山古墳(墳丘長55m 前方後円墳)等の中規模古墳が次々と築造される。

6世紀前半～中頃になると、北部九州最大の規模を誇る岩戸山古墳が築造され、「筑紫君」は絶頂期を迎える。続く乗場、善蔵塚、鶴見山の3基の大型前方後円墳は殆ど時間的な空白を置くことなく築造されており、このような状況は、火君の奥津城である熊本県氷川町所在の野津古墳群にも見られ、八女古墳群との関連が興味深い。

6世紀後半になると八女丘陵上に直径10数m程の小円墳が爆発的に発生する。一般的に後期群集墳と呼ばれるものであるが、規模が小さい上に古墳を築造する墓域が厳格に定められている為、一定地域に密集し一大古墳群を形成する傾向にある。しかし、これら群集墳は直径30m規模の円墳を盟主墳として伴う例はあるが、釘崎古墳群を除けば前方後円墳を伴う古墳群は八女古墳群には見当たらない。

6世紀末～7世紀初頭に至ると前方後円墳は完全に姿を消し、替わって八女古墳群東端付近に位置する童男山古墳(県指定史跡)や岩戸山古墳の西方に位置する岩戸山4号古墳(下茶屋古墳)など、巨石を用いた大型の石室を内部主体に持つ円墳が築造されるようになる。しかし、7世紀初頭以後これらの古墳に後続する大型円墳は全く見当たらず、また、6世紀中頃～後半頃に築造され始めた後期群集墳もこれと歩調を合わせるかのように突如として姿を消すようになる。

補 註

- (1) これまで一般には「豪族居館」の名称使用は構造上の規模や形状でのみ決定される傾向があった。ここで記した「広義の豪族居館」は規模・形状のみで判断され「住まい」としての事実認定が不明確なものも含めている。
- (2) ここで言う「狭義の豪族居館」とは豪族居館に関連した周辺施設を含めたものであり、「一部内容」とは、本施設築造主体者が残した活動の一端を示す遺構の存在を指す。なお、予想される内部遺構とは、これら施設のミニチュアも考慮されないとしない。

参考・引用文献

- 赤崎敏男1998 『辻の西遺跡(第2次調査)』八女市文化財調査報告書 第51集
 辰巳和弘2004 『中央氏族の本拠とその構造—「居館」論を見直す—』
 『季刊考古学・別冊14』雄山閣
 佐田 茂・伊崎俊秋1983 『立山山古墳群』八女市文化財調査報告書 第10集
 渡辺正気・宮小路賢宏1969 『石櫃山古墳』福岡県文化財調査報告書 第41集
 川述昭人1984 『瑞王寺古墳』筑後市文化財調査報告書 第3集
 佐田 茂1993 『欠塚古墳』筑後市文化財調査報告書 第8集
 八女市史(上巻) 第2編「原始」
 大塚恵治2003 『釘崎1号古墳・丸山古墳』八女市文化財調査報告書 第69集
 大塚恵治2005 『鶴見山古墳2』八女市文化財調査報告書 第72集
 真野和夫1972 『乗場古墳の調査』立山山古墳群—八女古墳群調査報告4—総集編
 今田治代2000 『南北朝野津古墳群の消長とその意義』『継体大王と6世紀の九州』(熊本古墳研究会)
 小田富士雄・真野和夫1971 『童男山古墳』『管の谷遺跡群—八女古墳群調査報告』
 赤崎敏男1987 『岩戸山古墳群』八女市文化財調査報告書 第15集

Ⅲ 調査の内容

1. 調査経過

今回の調査は、当該地区を病院、及び、保健施設の施設利用者への利便性向上が目的であり、駐車場として機能させる為、斜面を削平し平坦面を造成する必要があった。

事業主体者との協議の結果、調査区の東西中央で二分し西側を第1期、東側を第2期として発掘調査を実施する事になった。

調査の結果、西側地区では竪穴住居を中心とした古墳時代初頭の遺構群が検出され生活域の一部である事が判明した。東側地区においては石棺や甕棺を内部主体に抱いた方形周溝墓が検出され、墓域として成立している事が判明した。一部、竪穴住居や掘立柱建物が方形周溝墓によって切られており、その前後関連については後述する。

以下、各遺構別に詳細を記述する。

2. 検出遺構

(a) 竪穴式住居

1号竪穴式住居 (SB-01) [第4・5図 PL1]

調査区南西端で検出した平面長方形プランの竪穴式住居である。長軸方位を $N-51^{\circ}-E$ にとり、規模は $5.94m \times 3.96m$ 、深さ $0.22m$ を測る。主柱穴は長軸方向に2穴穿たれている。北西側の主柱穴は、柱穴中心から測り住居壁面から $0.6m$ に位置し、南東側主柱穴の $1.5m$ とは大きく異なっている。南東側主柱穴を基準とすれば、北西側の生活面は壁面から約 $1m$ 延びる事が予想され、本位置での空間利用の目的が問題となる。

北西短辺側、及び、東側コーナー部分にベッド状遺構が見られるが、前者は後者に比べ倍以上の幅を有しており、同じベッド状遺構においても機能差が付加されている事を示している。南西長辺の中央には屋内土壌が付設されており、その両脇に壁溝が見られたが全周はしていない。

出土遺物には甕形、坏、鉢形、高坏等があるが、弥生時代終末～古墳時代前期前葉までの時期幅があり、判然としない。しかし、SB-02との切り合い関係から古墳時代前期前葉と判断した。

2号竪穴式住居 (SB-02) [第6図 PL1]

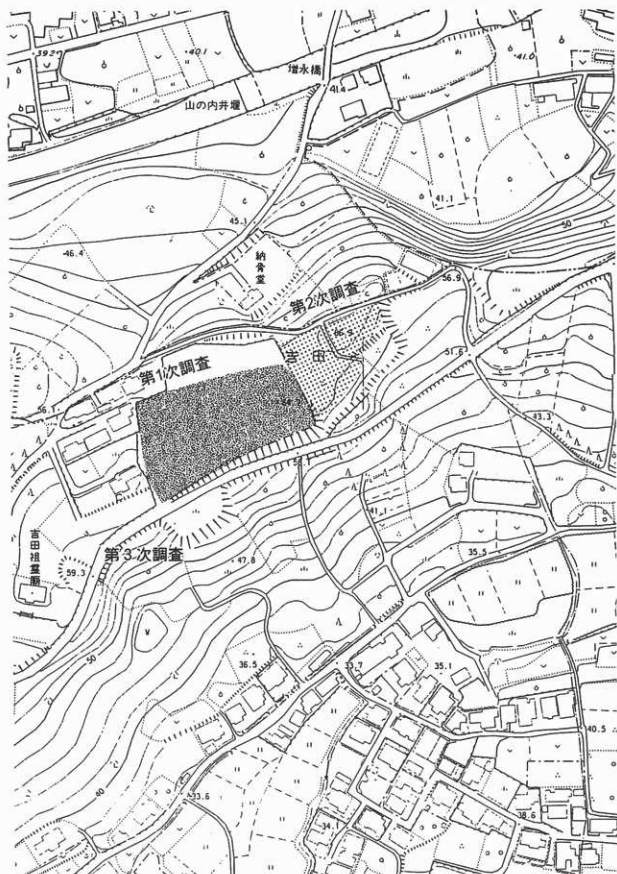
調査区南西端で検出した平面長方形プランの竪穴式住居である。長軸方位を $N-78^{\circ}-W$ にとり、規模は $6.96m \times 3.8m$ 、深さ $0.16m$ を測る。主柱穴は長軸方向に3穴(P-1・2・3)穿たれている。本来P-1・2が主柱穴となるものと思われ、P-3は建て替え等による新規の柱穴と考えられる。両短辺にはベッド状遺構が見られ、共に「L字」を成す。北辺のベッド状遺構の北東コーナー付近には2段になっている部分がある。これもベッド状遺構の空間利用の目的差があるものと考えられる。

西側長辺の中央には屋内土壌が付設されており、その両側には直径 $10cm$ 程の小穴が穿たれている。屋内土壌に曲線を描きながら連結する小溝があるが、用途は不明。

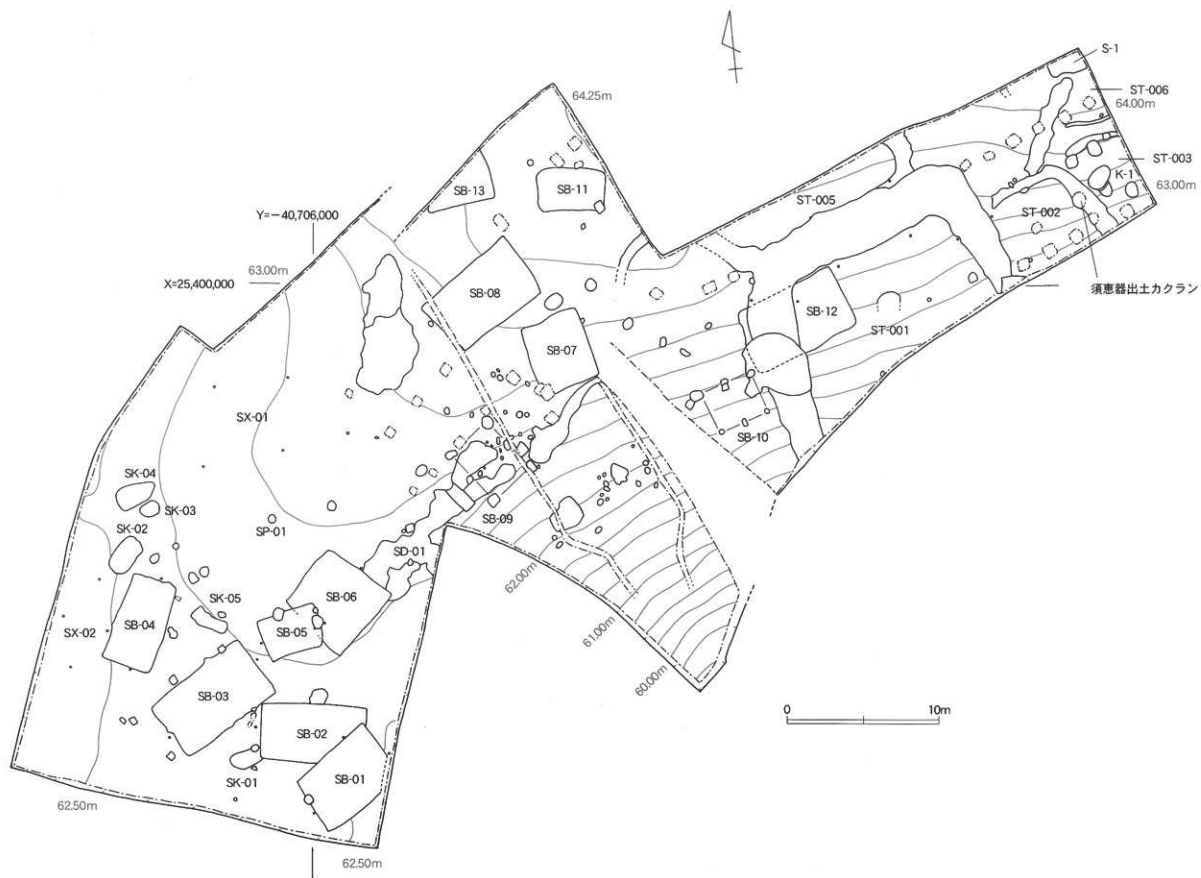
出土遺物には坏、鉢形、甕形、高坏がある。SB-01との切り合いもあり、古墳時代初頭の所産と判断した。

3号竪穴式住居 (SB-03) [第7・8図 PL1・2]

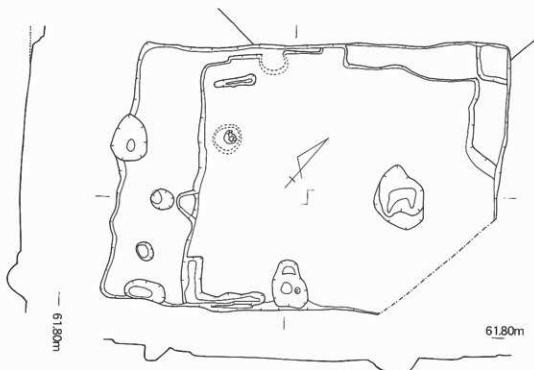
調査区南西端付近で検出した平面長方形プランの竪穴式住居である。長軸方位を $N-43^{\circ}-E$ にとり、規模は $6.14m \times 4.04m$ 、深さ $0.1m$ を測る。主柱穴は長軸方向に2穴穿たれている。南東短辺にはやや不整形なベッド状遺構が見られる。主柱間には直径 $0.8m$ の浅い窪みがあり、中央炉と思われるが



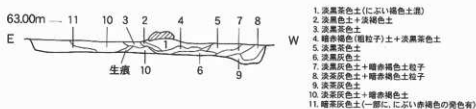
第2図 辻の西遺跡第1～3次調査位置図〔1/2, 500〕



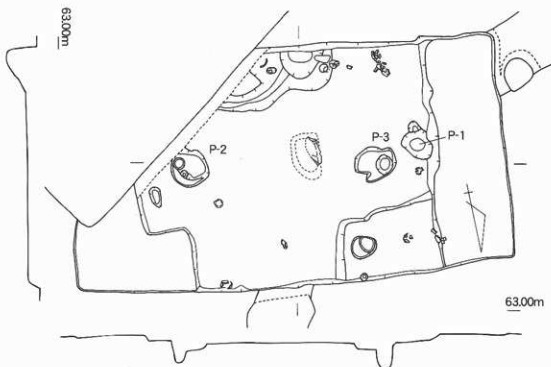
第3図 辻の西遺跡3次調査 遺構配置図〔1／250〕



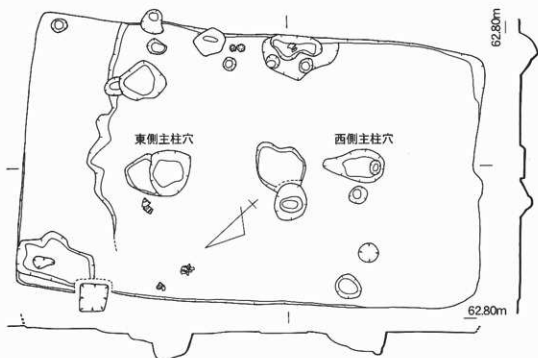
第4図 1号竪穴式住居 実測図〔1/60〕



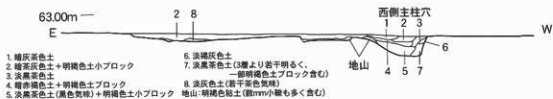
第5図 1号竪穴式住居 土層断面実測図〔1/60〕



第6図 2号竪穴式住居 実測図〔1/60〕



第7図 3号竪穴式住居 実測図〔1/60〕



第8図 3号竪穴式住居 土層断面実測図〔1/60〕



第9図 4号竪穴式住居 実測図〔1/60〕



第10図 4号竪穴式住居 土層断面実測図〔1/60〕

炭化物等は検出出来なかった。南西長辺の中央には屋内土壌が付設されており、SB-02と同様にその両側には直径10cm程の小穴が穿たれている。出土遺物には鉢形、高坏、ミニチュア土器等がある。

ベッド状遺構の未熟さや、住居中央に炉跡状の痕跡を残すなど古い要素が見られる事から、弥生時代終末頃の所産と判断した。

4号竪穴式住居 (SB-04) [第9・10図 PL2]

調査区南西端で検出した平面長方形プランの竪穴式住居である。長軸方位をN-25°-Eにとり、規模は5.95m×3.27m、深さ0.32mを測る。主柱穴は長軸方向に2穴穿たれている。両短辺にはベッド状遺構が見られ、共に「L字」を成す。主柱間には直径0.8m、深さ0.1m程の中央炉と思われる浅い窪みがあり、堆積土には褐色の焼土粒子が含まれていた。

北東長辺側にある2個のピットはL字ベッドの短辺に沿った部分にあり、相對峙しない位置関係にある事から本住居に伴う小穴と考えたい。用途については不明。

南長辺の中央には屋内土壌が付設されており、その両側には直径10cm程の小穴が穿たれている。内部には本土壌を封じるような状況で高坏受部が正置しており、住居廃絶に関わる祭祀行為と思われる。

出土遺物には甕、壺、鉢形、高坏等がある。古墳時代初頭の所産と判断した。

5号竪穴式住居 (SB-05) [第12図 PL3]

調査区南西付近で検出した平面長方形プランの竪穴式住居(建物)である。長軸方位をN-74°-Eにとり、規模は3.8m×2.88m、深さ0.15mを測る。主柱穴、ベッド状遺構にも見られず、中央炉的な施設も検出出来なかった。ただ、西長辺のやや北寄りには屋内土壌状の施設が付設されており、単なる竪穴とも考えられない。本遺跡中では新しい部類に入るSB-06を切り込んでおり、集落群とは関係の薄い小屋的な竪穴建物が考えられる。出土遺物はなかった。

6号竪穴式住居 (SB-06) [第13・14図 PL3]

調査区南西付近で検出した平面正方形プランの竪穴式住居である。長軸方位をN-24°-Eにとり、規模は5.3m×5.15m、深さ0.3mを測る。主柱穴は4穴で、南北方向の間隔が東西方向に比べ狭い。北辺にはベッド状遺構が見られ、「コ」字状を成す。北辺の中央と東西辺の端部がコーナー部分に比べ一段下がっており、SB-02と同様の空間利用の目的差が存在していたものと思われる。東側ベッド直上では、ソロバン玉形土製品が出土している。

主柱穴の西側2穴周辺には複数のピットが存在しており、少なくとも2回以上の立て替えがあった事を示唆している。また、主柱穴の中央には直径0.4m、深さ5~6cm程の浅い窪みがある。中央炉と思われるが堆積土には炭化物等は含まれていなかった。

南辺のやや西寄りに屋内土壌が付設されており、その両側には直径20cm程の小穴が穿たれている。

出土遺物が少なく時期比定は若干困難ではあるが、高坏の特徴から古墳時代前期前葉の所産と判断した。

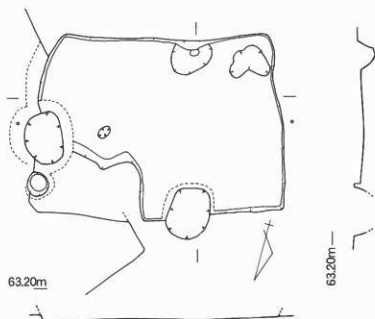
7号竪穴式住居 (SB-07) [第15図 PL3]

調査区中央部で検出した平面長方形プランの竪穴式住居(建物)である。長軸方位をN-13°-Wにとり、規模は4.88m×4.08m、深さ0.23~0.3mを測る。北短辺にはやや不整形なベッド状遺構が見られる。主柱穴は見られず、中央炉的な施設も検出出来なかった。

出土遺物には壺形、甕形、高坏等がある。ベッド状遺構の未熟さや、一部高坏の特徴など古い要素も見られる事から、弥生時代終末~古墳時代初頭の所産と判断した。

8号竪穴式住居 (SB-08) [第16図 PL4]

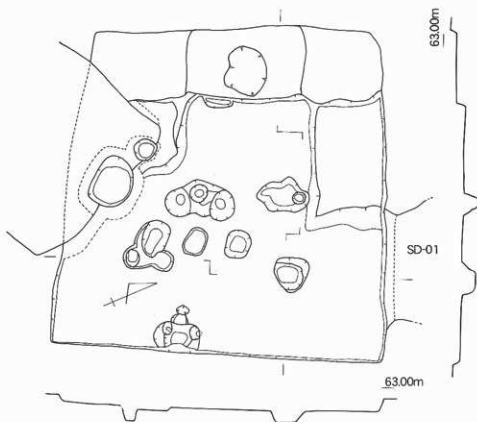
調査区中央部で検出した平面長方形プランの竪穴式住居である。長軸方位をN-51°-Eにとり、規模は7.2m×4.25~4.45m、深さ0.2mを測る。主柱穴は長軸方向に3穴(P-1・4・5)穿たれている。本来P-1・5が主柱穴となるものと思われ、P-4は棟持の補助柱の柱穴と考えられる。



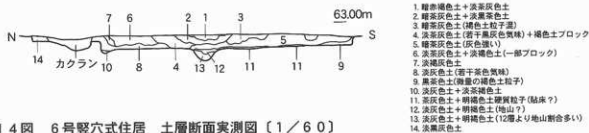
第11図 5号竪穴式住居（建物） 実測図（1/60）



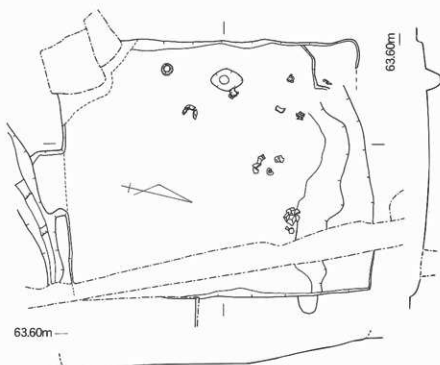
第12図 5号竪穴式住居（建物）
土層断面実測図（1/60）



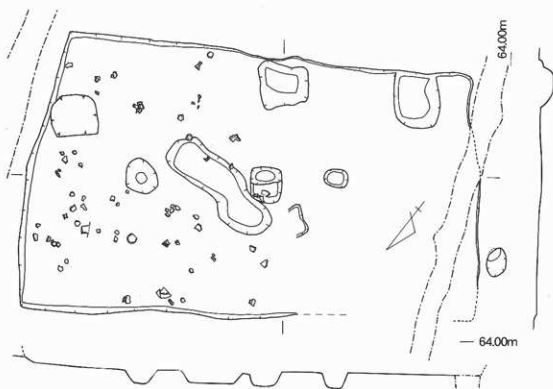
第13図 6号竪穴式住居 実測図（1/60）



第14図 6号竪穴式住居 土層断面実測図（1/60）



第15図 7号竖穴式住居 (建物)
実測図 [1/60]



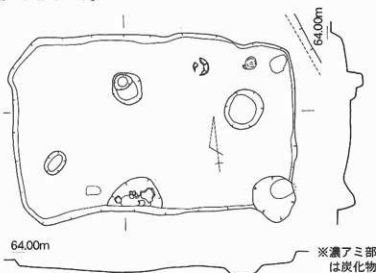
第16図 8号竖穴式住居 実測図 [1/60]

ベッド状遺構は見られない。南西長辺の中央やや西寄りには屋内土壌と思われる土壌（P-3）が付設されており、P-4の芯心とP-3南東端部が並ぶ。西側コーナーには貯蔵穴と考えられる0.9m×0.7mの土壌（P-2）が見られる。出土遺物には壺形、鉢形、高坏、椀形、把手状の土製品等がある。古墳時代初頭の所産と判断した。

11号竪穴式住居（SB-11） [第17図 PL4・5]

調査区中央北寄りで検出した平面長方形プランの竪穴式住居である。長軸方位をN-84°-Wにとり、規模は4.5m×2.84m、深さ0.2mを測る。主柱穴は長軸方向から東に13°傾け2穴穿たれている。ベッド状遺構は見られず、西長辺の中央やや北寄りには屋内土壌が付設されており、内部からは5cm~10cm程の長円形を成す緑色片岩製の扁平石材が複数枚が一箇所に集中出土している。また、土壌から北に20cmには炭化物の集積も認められ、本土壌を封じるにあたり、火の使用を伴った祭祀行為があったと思われる。

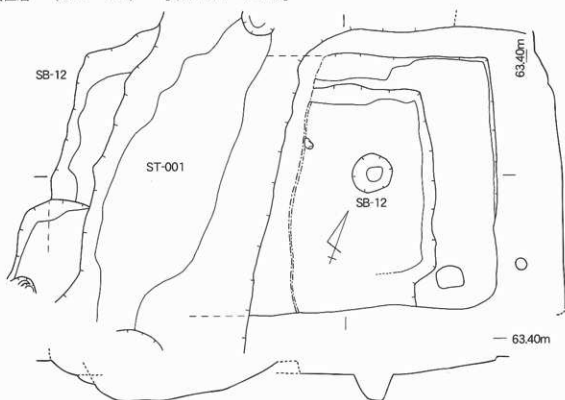
南東コーナーには倒置された鉢の土師器と共に炭化物が検出されており、住居廃絶に伴う行為の跡とも考えられる。出土遺物には壺形、鉢形、高坏等がある。鉢の持つ特徴から、本住居の廃絶時期を古墳時代前期前葉と判断した。



第17図 11号竪穴式住居 実測図〔1/60〕

12号竪穴式住居（SB-12） [第18図 PL5]

調査区東側で検出した平面長方形プランの竪穴式住居である。長軸方位をN-70°-Eにとり、規模は6.64m×4.1m、深さ0.42mを測る。住居の北半分をST-001に切られている為検出された主柱穴は1穴であるが、本来主柱穴は長軸方向に2穴穿たれていた



第18図 12号竪穴式住居 実測図〔1/60〕

ものと考えられる。南短辺側、及び、東長辺側にベッド状遺構が見られるが、SB-01と同様、前者は後

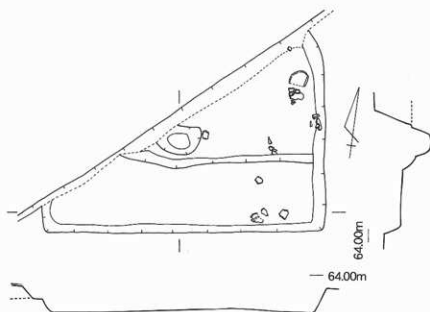
者に比べ倍以上の幅を有しており、同じベッド状遺構においても機能差が付加されている事を示している。但し、後者のベッド状遺構は幅が10 cm～15 cmと極端に狭く、その空間利用について判断する材料がない。

出土遺物には手づくね土器、高坏があるが、出土量が少なく時期比定は困難であるが、古墳時代初頭～前期前葉の中で考えたい。

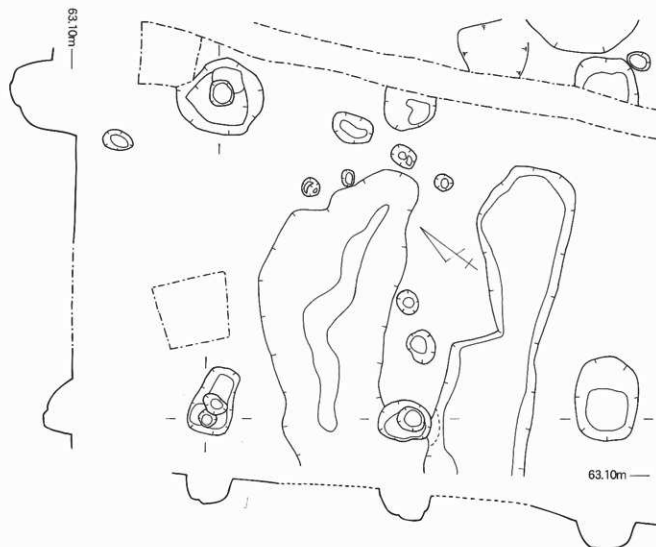
13号竪穴式住居 (SB-13)

[第19図 PL5]

調査区東側で検出した平面長方形プランの竪穴式住居である。長軸方位をN-8°-Wにとり、規模は短軸長4.52m、深さ0.5mを測る。住居の大半が調査区外に出てい



第19図 13号竪穴式住居 実測図 (1/60)



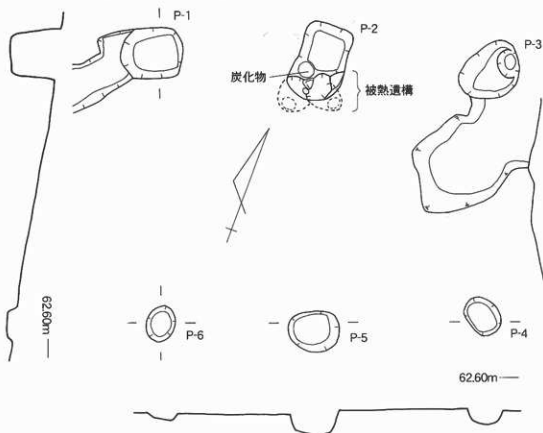
第20図 9号掘立柱建物 実測図 (1/40)

る為、検出された主柱穴は1穴であるが、本来主柱穴は長軸方向に2穴穿たれていたものと考えられる。南短辺側にベッド状遺構が見られるが、西長辺にも接続しているものと考えられる。出土遺物には甕形、高坏等がある。古墳時代前期前葉か。

(b) 掘立柱建物

9号掘立柱建物 (SB-09) [第20図 PL6]

調査区中央附近で検出した6本柱の掘立柱建物である。長軸方位をN-37°-Wに取る1間×2間の側柱建物である。規模は4.26m×3.5m、床面積14.9㎡を測る。柱穴堀方プランは円形、または、隅丸方形で、標高の高い北側柱穴がやや規模が大きい。柱痕跡は認められなかったが、6本中3本に柱圧痕が残る。



第21図 10号掘立柱建物 実測図 (1/40)

10号掘立柱建物 (SB-10) [第21図 PL6]

調査区中央やや東寄りで検出した6本柱の掘立柱建物である。ST-001に切られている。長軸方位をN-69°-Eに取る1間×2間の側柱建物である。規模は3.4m×2.84m、床面積9.7㎡を測る。柱穴堀方プランは円形、または、隅丸方形で、標高の高い北側側柱列がやや規模が大きい。柱痕跡はP-2検出時に認められたが、他では認められなかった。

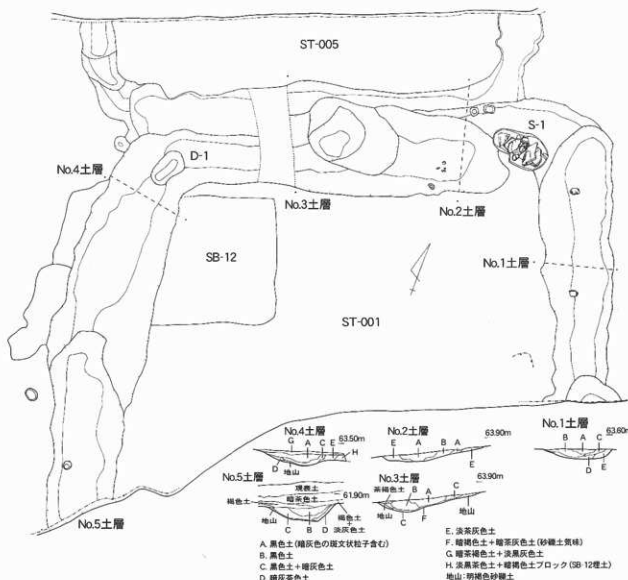
P-2検出時には、炭化物粒子が多量に混入している他遺構を本建物が切り込む形が認められた。掘削後、内部から赤褐色被熱粘土塊や直径1.5cmを測る炭化した丸太の一部が垂直方向をもって出土した事により、この遺構がSX-01と同様の被熱遺構である事が判明した。ただし、出土遺物についてはSB-10のP-2で取り上げを行っている。

(c) 方形周溝墓群

1号方形周溝墓 (ST-001) [第22・23・24図 PL6~9]

調査区東側で検出した平面正方形プランをとると考えられる群中最大規模の方形周溝墓である。長軸方位をN-20°-Wにとり、規模は最大幅18.0m、最小幅17.0m、最大深度0.7m、最小深度0.12m、最大周溝幅2.88m、最小周溝幅1.62mを測る。

丘陵部の南緩斜面に位置しており、ST-002の周溝一部を担い、ST-005の南側周溝を切っている。過去に斜面側を中心に相当の削平を受けており、主体部の痕跡は検出出来なかったが、北東コーナーで

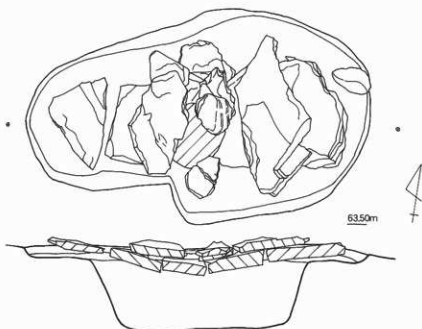


第22図 1号・5号方形周溝墓 実測図〔1/120〕

石蓋土墳墓 (S-1)、北西コーナーで木蓋土墳墓 (D-1) を検出した。特に石蓋土墳墓は、周溝内側が突出部状に張り出した先端部に掘り込まれており、本周溝墓築造当初から計画されていたようだ。

S-1は11枚の片岩板石を蓋とした土墳墓で、墓壙の平面プランは掘り方が不整楕円形、主体部が隅丸長方形を呈し、長軸方位を $N-82^{\circ}-E$ にとる。掘り方規模は長軸長1.86m、短軸長1.07m、深さ0.05mを測り、主体部は長軸長1.18m、短軸長0.6m、深さ0.42mを測る。赤色顔料や出土遺物は認められなかった。

D-1は木板の蓋が想定される土墳



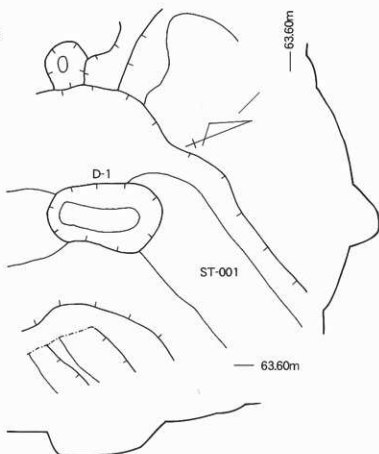
第23図 1号方形周溝墓内 石蓋土墳墓実測図〔1/20〕

第24図 1号方形周溝墓内
木蓋土壌墓実測図 (1/40)

墓で、墓壇の平面プランは楕円形を呈し、長軸方位を $N-22^{\circ}-E$ にとる。規模は長軸長1.23m、短軸長0.74m、深さ0.35mを測る。出土遺物等は認められなかった。

周溝は東側と北側は直角に交わるが、西側部分はやや角度を広げ開き気味となる。また、周溝北側の底面を基準とすると、東西の周溝底面は共に一段下げて掘削されている部分が存在する。特に西側部分はコーナー以南が下げられており、周溝掘削に関わった集団が周溝の南北で異なる可能性を示唆している。

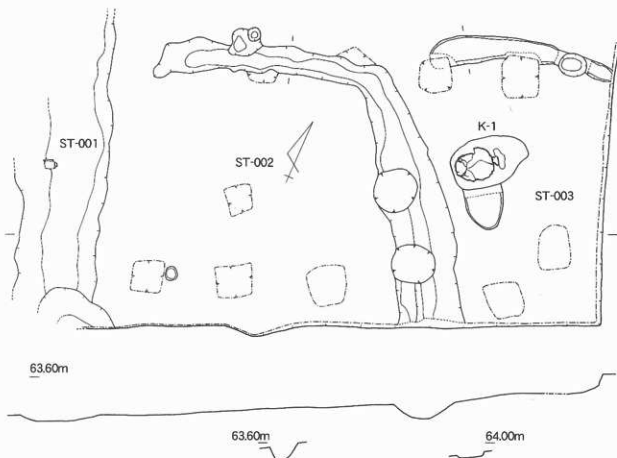
周溝北側では土師器高坏脚部1個が底面に貼り付く状況で出土した。



2号方形周溝墓 (ST-002)

[第25図 PL9]

調査区東側で検出した方形周溝墓である。

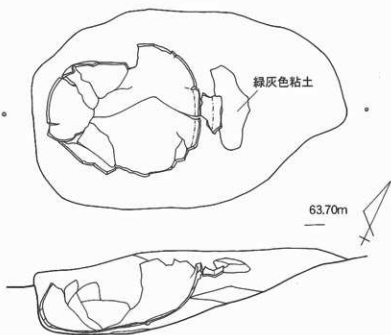


第25図 2号・3号方形周溝墓 実測図 (1/80)

平面プランは不明。長軸方位をN-24°-Wにとり、規模は最大幅7.88m、最小幅5.7m、最大深度0.48m、最小深度0.22m、最大周溝幅1.42m、最小周溝幅0.56mを測る。

丘陵部の南緩斜面に位置しており、周溝一部をST-001に遺存している。ST-001同様、過去に斜面側を中心に相当の削平を受けており、主体部の痕跡は検出出来なかった。

周溝北側はST-001と直角に角度をとるが、東側部分はやや角度を広げ開き気味となる。周溝北西端部に存在するST-001との間の幅0.9m×1.02mのスペースは周溝墓内に入りする為の空間と思われる。後述するが、周溝東側の攪乱内から須恵器壺1個が底面から浮いた状況で出土した。壺のもつ特徴から熊本県北部産のものと考えられる。



第26図 3号方形周溝墓内
合口式甕棺墓実測図(1/20)

3号方形周溝墓(ST-003) [第25・26図 PL9・10]

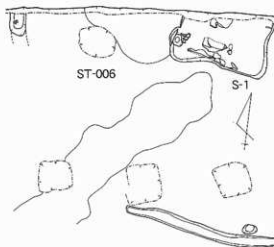
調査区東側で検出した方形周溝墓である。平面プラン、長軸方位等は不明。最大深度0.13m、最小深度0.1m、最大周溝幅0.6m、最小周溝幅0.34mを測る。

周溝の大半が調査区外となっている為、状況の詳細は不明である。丘陵部の南緩斜面に位置しており、周溝一部をST-002に遺存している。周溝北西端部に存在するST-002との間の幅0.9mのスペースは、ST-002と同様の周溝墓内に入りする為の空間と思われる。過去に斜面側、及び、上部平坦面において相当の削平を受けてはいるが、主体部と思われる合口式の甕棺墓を1基検出した。甕棺内面には赤色顔料(酸化鉄か?)が前面塗布されており、合口部分には緑灰色粘土が遺存していた。墓墳の平面プランは不整楕円形を呈し、長軸方位をN-64°-Eにとる。規模は長軸長1.68m、短軸長1.05m、深さ0.43mを測る。しかしながら、本甕棺墓は墓域内に入る為の出入口に接近し過ぎており、仮に本周溝墓の中心部に第一主体部があると想定するならば、甕棺墓は第2主体部となる可能性もある。

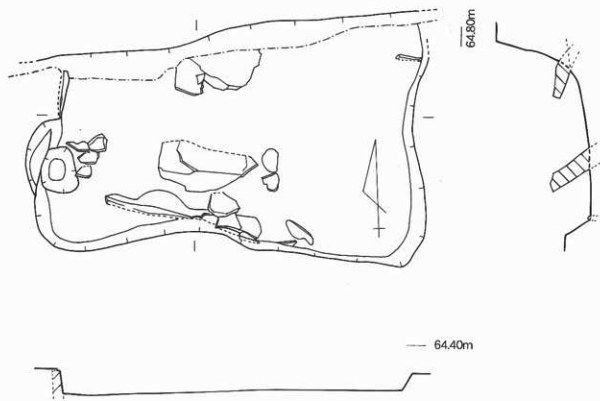
5号方形周溝墓(ST-005) [第22図 PL6]

調査区東側で検出した方形周溝墓である。平面プラン、長軸方位等は不明。検出最大幅14.7m、最大深度0.29m、最小深度0.1m、最大周溝幅1.3m+α、最小周溝幅0.88mを測る。

群中、最高位の丘陵上部平坦面に位置しており、周溝南側の大半をST-001に切られている。過去に上部平坦面において相当の削平を受けており、遺存状況は極めて悪い。周溝南西側の底面は三段の段下げ部分が存在する。各段が小規模な為、ST-001のような周溝掘削に関わった集団が異なる可能性は考えにくい、数度の再掘削は考えても良いかもしれない。



第27図 6号方形周溝墓
実測図(1/80)



第28図 6号方形周溝墓内 石棺墓実測図(1/20)

6号方形周溝墓(ST-006) [第27・28図 PL9・10]

調査区東側で検出した方形周溝墓である。平面プラン、長軸方位等は不明。最大深度0.1m、最小深度0.04m、最大周溝幅0.34m、最小周溝幅0.16mを測る。

丘陵上部平坦面に位置しており、過去に上部平坦面において相当の削平を受けており、また、周溝の大半が調査区外となっている為、周溝の詳細な状況は不明である。

周溝内側で主体部と思われる石棺墓(S-1)を1基検出した。しかし破壊が激しく、側板は斜めになり、石棺小口部分は殆ど遺存していなかった。墓壙の平面プランは不整長方形を呈し、長軸方位をN-79°-Wにとる。規模は長軸長2.08m、短軸長1.3m+α、深さ0.14mを測る。赤色顔料や出土遺物は認められなかった。

本石棺の東西方向に並列している2枚の側板の南側にもう1枚、垂直方向に立つ板石が存在する。詳細は不明であるが、2床並列の石棺墓の可能性もある。

(d) 土壌

1号土壌(SK-01) [第29図]

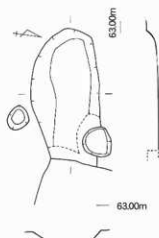
調査区西端で検出した平面長円形プランを呈する土壌である。長軸方位をN-82°-Eに取り、規模は2.24m×1.1m、深さ0.21mを測る。SB-02に切られている。出土遺物はなく、時期比定については言及出来ないが、切り合い関係から見て古墳時代初頭以前の所産と思われる。

2号土壌(SK-02) [第30図]

調査区西側で検出した平面隅九方形プランを呈する土壌である。長軸方位をN-47°-Eに取り、規模は2.52m×1.53m、深さ0.68mを測る。断面は2段となり、土壌南寄りに深さ60cmの穴が穿たれている。灰色系の覆土が中心であり、近世由来の土壌の可能性もある。出土遺物はなかった。

3号土壌(SK-03) [第31図]

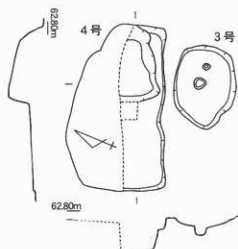
調査区西側で検出した平面楕円形プランを呈する土壌である。長軸方位をN-65°-Eに取り、規模は



第29図 1号土坑
実測図〔1/60〕



第30図 2号土坑
実測図〔1/60〕



第31図 3号・4号土坑
実測図〔1/60〕

1. 3.5m×1.0m、深さ0.2mを測る。土坑中央に深さ15cmの穴が穿たれているが、覆土状況から柱痕跡等の性格ではない。出土遺物はなく、時期・性格については不明。

4号土坑 (SK-04) [第31図]

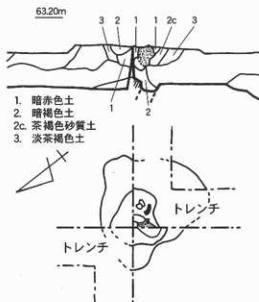
調査区西側で検出した平面不整長方形プランを呈する土坑である。長軸方位をN-67°-Eに取り、規模は2.63m×1.56m、深さ0.14m-0.49mを測る。断面は2段となり、土坑東寄りに深さ40cmの穴が穿たれている。灰色系の覆土が中心の土坑であるが時期・性格については不明。遺物無し。



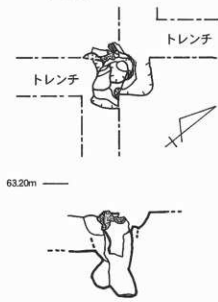
第32図 5号土坑
実測図〔1/60〕

5号土坑 (SK-05) [第32図]

調査区西側で検出した平面隅丸長方形プランを呈する土坑である。長軸方位をN-76°-Wに取り、規模は2.04m+α×0.72m、深さ0.23mを測る。断面は2段となるが、土坑中央寄りに穿たれている穴はピットの可能性がある。出土遺物もなく、時期・性格については不明。



第33図 1号被熱ピット土層断面、及び、平面実測図〔1/30〕



第34図 1号被熱ピット、完掘後断面見透し、及び、平面実測図〔1/30〕

(e) その他 (SX)

1号被熱ピット (SX-01) [第33・34図 PL10・11]

調査区中央北側で検出した平面隅丸方形プランを呈すると思われるピットである。検出当初は少量の焼土と一部炭化材が認められる程度で平面プランも明瞭ではなく、基盤土に僅かに遺存した表面的な被熱痕跡と

※遺アミ部は環元色

の認識しかなかった。被熱痕の下部堆積を確認する目的でトレンチを十字方向にいったところ、直径6cm程の炭化半截丸太材、及び、還元色や暗赤褐色を呈する被熱粘土塊が出土した。

精査の結果、掘り方上面は隅丸方形を成し、最下部付近は小穴が三方向に分岐し三脚状となっていた。ピット上半部の高被熱部は最上部に炭化材と被熱により硬化した淡黄灰色粘土塊、上部から中部にかけ被熱により極端に硬化した暗黒灰色粘土塊がピット壁に貼り付く形で出土した。炭化材直下の淡黄灰色粘土部分は片口状に水平に窪んでいるが、端部状況から当初は上部構造物が存在していたようである。つまり、粘土で木材を筒状に被覆し点火（点火地点、方法等は不明）。木材が燃焼、炭化した過程が予想される。

同様な被熱ピットがSB-10のP-2に存在する。P-2例はSB-10に切られており、古墳時代初頭以前の所産である事が確実である。SX-01とした本例も、時期比定については、これに準拠して良いものとする。

規模は南北長0.44m、東西長0.44m、検出面からの深さは0.68mを測る。

2号不明遺構 (SX-02) [PL11]

調査区北西端で検出した、形状不明の遺構である。暗茶灰色の土色が不明瞭に広がっていた為、全体を1.5m四方の8区画に分け掘り下げた。10cm程下げると基盤土が現れ、調査はその時点で終了とした。

一部に自然面を残す15cm大の黒曜石母岩が1個出土した。

IV 出土遺物 [第35～39図 PL12～16]

1～7はSB-01より出土した。1・2は壺形口縁部で、1は外面に肥厚がある。3・4は坏。5は大型の鉢形で、底部は若干尖り底を成す。6は高坏脚部で、頸部太く短脚気味になる。内面下部はナデ調整。7は蓋形。

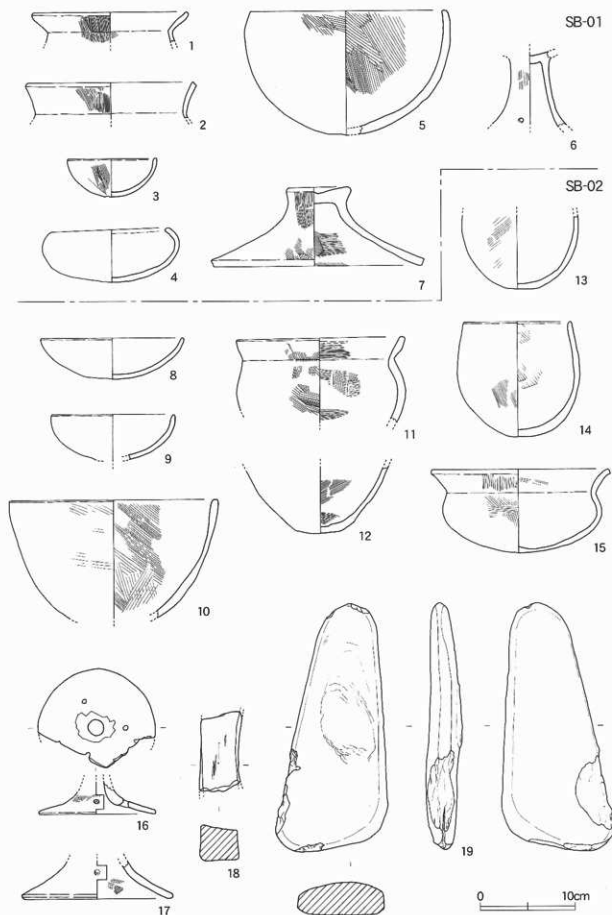
8～19はSB-02より出土した。8・9は坏。10は底部を欠損するが鉢形と思われる。11～15は壺形で、12の底部内面には放射状のハケ調整が見られる。外底部は平底。13・14の外底部は僅かに平底を残す。16・17は高坏の脚部で、16の脚端部の屈曲は顕著である。18は柱状の砥石で白色の砂岩製。4面に使用痕がある。19は雲母片岩製の板状石材で、1面のみ使用痕跡があるが用途は不明。住居内の屋内土壌の中位部分から出土した。

20～24はSB-03より出土した。20は壺形、又は、壺形の底部で、尖り底状の平底を僅かに残す。21・22は鉢形で、22は尖り底気味ではあるが丸底化している。23は高坏の坏部で、上半部を直線的に外方に延ばす。24は蓋状のミニチュアで、用途は不明。突孔を意図した小孔が1対あるが、共に未貫通のままである。

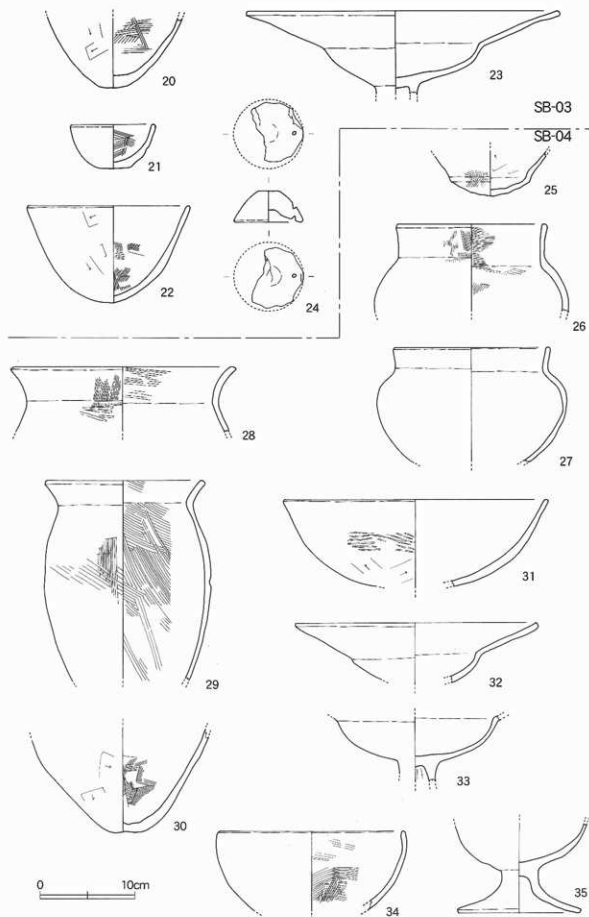
25～41はSB-04より出土した。25～27は壺形で、25は小型丸底壺、26・27は直口気味の口縁をもつ。28～30は壺形で、長胴が顕著となっている。30は尖り底状の平底を僅かに残す。31は大型の鉢形。32～39は高坏の坏部、又は、脚部で、32・33は内湾した坏部に直線的な上半部を外方に延ばす。35・36は短脚に碗形の坏部が乗るもので、37は若干長い脚部に屈曲をもつ坏部が乗る。40は石錐状の突起物を有する石製品で、石包丁等石製品の突孔に用いたと考えられる。41は雲母片岩製の棒状の石製品で2面に使用痕が認められる。屋内土壌の中位から出土で、状況的には土壌封じ的な要素を担っていた可能性もある。

42～44はSB-06より出土した。42は緑色片岩製の石包丁未成品。43は白色の砂岩製砥石で5面に使用痕が認められる。44は土製の紡錘車。算盤形に似るが、所謂ソロバン玉形紡錘車とは異なっている。

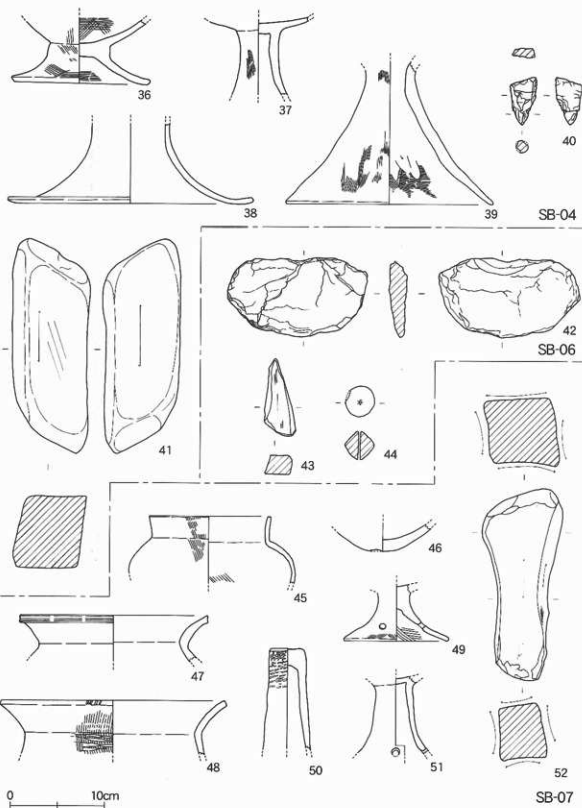
45～52はSB-07より出土した。45・46は壺形で、46は外底面に平底を僅かに残す。47・48は壺形で、47は須恵器で流入品。小田編年のV期。48は口唇部に刻目を押圧し、外面に荒い水平方向のタタキを施す。49～51は高坏脚部で、50は脚部を坏部に差し込み、接合されている。外面には右上がりのタタキを有する。52は白色の砂岩製砥石で4面に使用痕が認められる。全体的に湾曲が大きく、



第35図 出土遺物実測図〔1/4〕



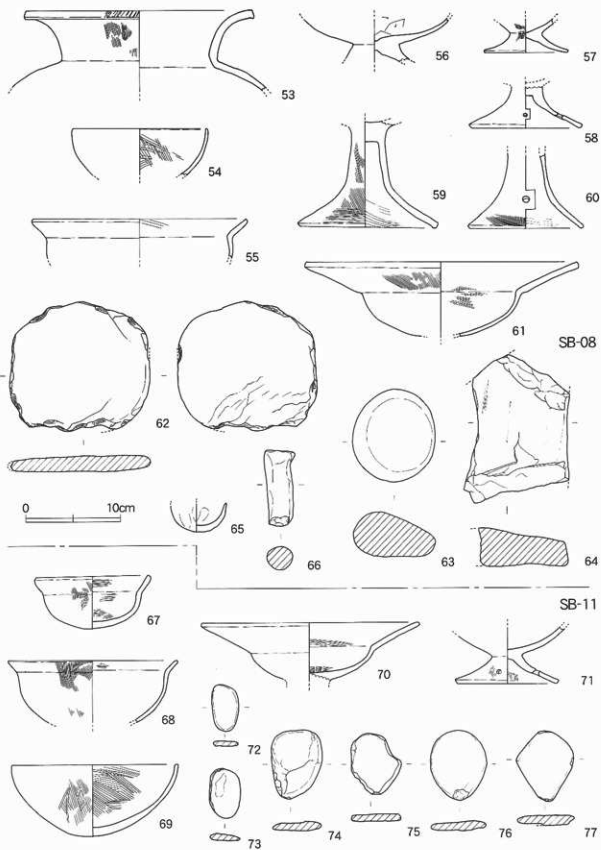
第36図 出土遺物実測図〔1/4〕



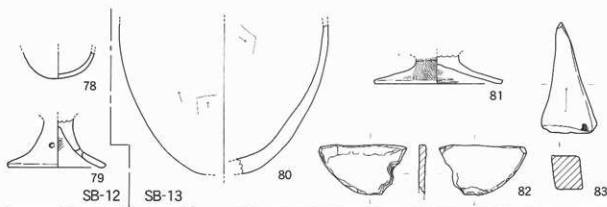
第37図 出土遺物実測図〔1/4〕

長期間の使用が考えられる。

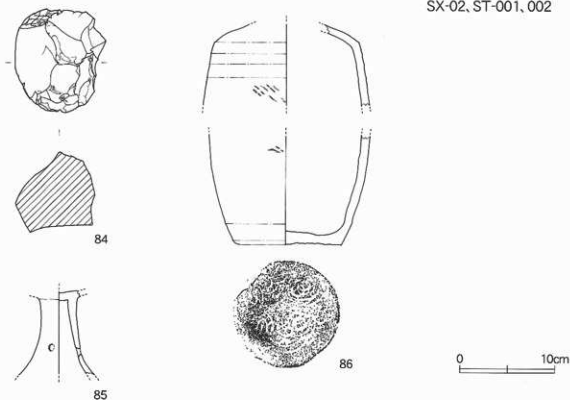
53～66はSB-08より出土した。53は大型の壺形で、口唇部に刻目を押圧している。54・55は鉢形。56～61は高坏脚部、又は、坏部で、56～60は碗形の坏部が乗るものと思われるが、61は直線的に外方に延びる上半部をもつ。62は雲母片岩製の板石状石製品。円盤形石材の外縁を打ち欠き方形状に整形している。表面には使用痕は認められない。63はすり石。64は白色の砂岩砥石で、非常に粒子



第38図 出土遺物 実測図〔1/4〕



SX-02, ST-001, 002



第39図 出土遺物実測図(1/4)

が細かい。表面には鉄錆の付着が多数認められ、鉄製品の研摩が考えられる。65はミニチュアの碗形土器。66は把手状の土製品。糸島の御床松原遺跡出土の土製品に類似する。

67～77はSB-11より出土した。67は小型丸底甕で、口縁部が若干内湾し外面を肥厚している。68・69は鉢形で、69は僅かに平底を残す。70・71は高坏。72～77は片岩製の円盤状の石製品。屋内土壌の下部に集積しており、棒状石製品と同様、土壇封じ等の祭祀に用いられた可能性がある。

78・79はSB-12より出土した。78は小型の手づくね土器で、鉢形を成す。79は短脚の高坏。

80～83はSB-13より出土した。80は甕形で、外底面は尖り底を呈する。81は短脚の高坏と思われるが、器台の可能性も残る。82は緑色片岩の石包丁未成品。83は非常に粒子の細かい乳白色石材を用いた砥石で、表面には鉄錆が多量に遺存している。泥岩製か。

84はSX-02より出土した黒曜石の母岩。自然面を数多く残す。

85はST-001の周溝内から出土した高坏の脚部。脚体部から裾部にかけて3つの突孔がある。

86はST-002内のカクラン内から出土した瓶形長胴壺で、外底面に同心円状のタタキ痕が明瞭に残っている。胴部外面はタタキ整形後にヘラ削りを施し、内面は回転ナデで仕上げる。肩部外面は若干淡赤褐色気味となる。熊本県北部の荒屋・宇城産須恵器と思われる。

辻の西遺跡第3次調査 出土土器観察表

(No.1)

押印	掲載 番号	実測 番号	出土 遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整(外面、内面)	色調、胎土、焼成	備 考
35	1	25	SB-01	壺形	16	—	—	縦ハケ、斜ハケ	黄茶色、石英・長石粒含む、 やや不良	
35	2	30	SB-01	壺形	17.4	—	—	縦ハケ	淡褐色、石英・片岩・長石含む、 やや不良	口唇直下に炭灰炭化物
35	3	24	SB-01	坏	9.3	—	4	左上リハケ、ナデ	茶褐色、石英・長石含む、良好	外面一部に黒斑
35	4	28	SB-01	坏	12.3	—	5.5	不明	淡赤褐色、精織、良好	
35	5	27	SB-01	鉢形	20.2	—	—	左上リタタキ・ハケ、 左上リハケ	黄褐色、石英・片岩粒含む、 良好	内外底面に被熱黒化
35	6	29	SB-01	高坏	—	つまみ部 6.8	—	面取り、ナデ	淡茶褐色、精織、良好	
35	7	26	SB-01	蓋形	11.7	—	—	縦ハケ、横ハケ	淡茶灰色、精織、良好	
35	8	40	SB-02	坏	15	—	—	不明、不明	淡黄茶色、片岩・長石粒多い、 やや不良	一部に黒斑
35	9	41	SB-02	坏	12.8	—	—	不明、不明	淡黄茶色、多量の石英・片岩 粒含む、やや不良	
35	10	32	SB-02	鉢形	22	—	—	タタキ後ナデ、 左上リハケ	淡黄茶色、多量の石英・片岩 粒含む、良好	器面荒い
35	11	39	SB-02	壺形	17.5	—	—	ハケ、横ハケ	黄茶色、多量の石英粒含む、 やや不良	外面体部に黒斑
35	12	33	SB-02	壺形	—	4.5	—	タタキ、放射状の ハケ	黄茶色、多量の石英・長石粒 含む、良好	内底面に放射状のハケ
35	13	37	SB-02	壺形	—	—	—	外底部ケズリ・体部 右上リタタキ・ハケ	淡黄茶灰色、少量の石英・長 石粒、良好	僅かに平底残す、内底 面に放射状のハケ
35	14	42	SB-02	壺形	11	—	—	ハケ、ナデ後ハケ	淡黄茶色、石英・片岩・長石 含む、不良	無頭蓋か
35	15	43	SB-02	壺形	18.5	—	—	外底ケズリ・ハケ、 ハケ	淡黄茶色、石英・片岩粒多い、 やや不良	外面に黒斑
35	16	38	SB-02	高坏	—	12.2	—	斜ハケ、不明	暗茶褐色、僅かに片岩粒含む、 良好	3孔、内面に黒斑
35	17	45	SB-02	高坏	—	16	—	ナデ、ハケ後ナデ	暗赤褐色、精織、良好	接地部にフラット面
36	20	81	SB-03	壺又は 壺	—	—	—	外底ケズリ・体部 ハケ、右上リハケ	淡茶褐色、石英・片岩・長石 粒含む、良好	外面 1 / 3 に黒斑
36	21	80	SB-03	鉢形	8.7	2.6	4.5	不明、ハケ	暗茶灰色、石英・長石粒含む、 良好	
36	22	82	SB-03	鉢形	16.7	—	—	内外面ハケ	淡茶灰色、片岩・長石粒含む、 やや不良	器面荒い
36	23	83	SB-03	高坏	32.7	—	—	不明、不明	赤褐色、少量の石英・暗褐色 粒子含む、やや不良	
36	24	118	SB-03	ミニチ ュア	7.3	2	3.3	内外面ナデ	淡褐色、精織、良好	精製胎土、未穿孔 3
36	25	88	SB-04	壺形	—	—	—	外底ケズリ・体部 ハケ、不明	淡茶灰色、石英・雲母粒含む、 やや不良	外底面に黒斑
36	26	89	SB-04	壺形	25.6	—	—	タタキ・ハケ、ハケ	淡白黄色、石英・片岩・長石 粒多量、良好	体部中央に黒斑
36	27	52	SB-04	壺形	16.2	—	—	ハケ？、ハケ？	淡白黄色、石英・片岩・長石 粒多量、良好	
36	28	90	SB-04	壺形	24	—	—	タタキ、ハケ	淡茶褐色、石英・片岩粒含む、 良好	口唇部をつまむ
36	29	55	SB-04	壺形	16.3	—	—	胴部中央にタタキ、 ハケ	淡茶褐色、石英・片岩粒含む、 良好	胴部中央を帯状の タタキ
36	30	85	SB-04	壺形	—	—	—	不明、ハケ	白灰色、片岩・長石粒含む、 良好	内底面付近は放射状の ハケ
36	31	58	SB-04	鉢形	27.6	—	—	タタキ・ヘラ、ナデ	暗茶褐色、石英・片岩粒多い、 良好	
36	32	86	SB-04	高坏	25.4	—	—	内外面 不明	茶褐色、微量の片岩粒、良好	口唇部に黒斑
36	33	87	SB-04	高坏	—	—	—	内外面 不明	茶褐色、微量の石英・褐色粒 子、良好	
36	34	57	SB-04	高坏	19.2	—	—	不明、ハケ	淡赤褐色、精織、良好	
36	35	53	SB-04	高坏	—	13	—	ハケ、ナデ	暗赤褐色、精織、良好	

押図	掲載 番号	実測 番号	出土 遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整(外面、内面)	色調、胎土、焼成	備 考
37	36	56	SB-04	高坏	—	14	—	内外面 ハケ	明褐色、微量の石英・褐色粒子 良好	
37	37	92	SB-04	高坏	—	—	—	内外面 不明	暗茶褐色、微量の石英・褐色粒子 良好	
37	38	94	SB-04	高坏	—	26	—	内外面 不明	明茶褐色、微量の石英・褐色粒子 良好	
37	39	91	SB-04	高坏	—	22	—	ハケ、ナデ・ハケ	淡茶灰色、石英・片岩粒子、良好	中位以上に暗灰色帯
37	44	95	SB-06	土製 紡錘車	3.1	—	3	内外面 ナデ?	淡赤褐色、微量の石英・長石粒、 良好	
37	45	77	SB-07	壺形	12.9	—	—	ハケ?、ハケ	茶褐色、精織、良好	薄手。頸部に黒斑
37	46	111	SB-07	壺形	—	3	—	外底部にケズリ、 ハケ	淡茶灰色、石英・片岩粒子、良好	僅かに平底残す。
37	47	105	SB-07	壺形	19.8	—	—	内外面 回転ナデ	淡黒灰色、精織、良好	須恵器。外面に自然釉
37	48	106	SB-07	壺形	23.6	—	—	タタキ・ハケ、縦ハケ 後横ハケ	淡茶色、石英・片岩粒子、良好	口唇部に刻目
37	49	78	SB-07	高坏	—	10.8	—	内外面 ハケ	茶褐色、微量の石英・褐色粒子、 良好	脚端内面1/2に黒斑 3孔
37	50	79	SB-07	高坏	—	—	—	タタキ、ナデ	茶褐色、精織、良好	外面タタキは中位以上
37	51	113	SB-07	高坏	—	—	—	ナデ?、ナデ?	淡黄茶色、精織、やや不良	
38	53	70	SB-08	壺形	24	—	—	ハケ、指ナデ	淡黄茶色、精織、良好	口唇下部をつまみ出 し、刻目
38	54	60	SB-08	鉢形	14	—	—	不明、ハケ	淡黄茶色、微量の石英・褐色 粒子、やや不良	
38	55	69	SB-08	鉢形	22.4	—	—	不明、ハケ	黄茶色、石英・長石粒多い、 良好	
38	56	74	SB-08	高坏	—	—	—	不明、ヘラ調整?	明赤褐色、微量の石英・褐色 粒子、良好	内底面に棒状施具の 回転痕跡
38	57	67	SB-08	高坏	—	8.8	—	ハケ、不明	明赤褐色、精織、良好	脚登より小さな碗状 の坏部
38	58	65	SB-08	高坏	—	11.3	—	内外面 不明	暗茶灰色、微量の石英・褐色 粒子、やや不良	
38	59	63	SB-08	高坏	—	14.5	—	内外面 ハケ	淡黄茶褐色、石英・片岩粒若 干多い、良好	
38	60	62	SB-08	高坏	—	12	—	ハケ、不明	暗赤褐色、微量の石英・褐色 粒子、良好	脚端や接地面が平滑
38	61	59	SB-08	高坏	28.4	—	—	内外面 ハケ	淡茶灰色、石英・長石多く含 む、良好	
38	65	66	SB-08	碗形	6	—	3	内外面 指押さえ	淡茶褐色、石英・片岩粒含む、 やや不良	ミニチュア土器
38	66	61	SB-08	把手状 土製品	—	幅3.3	高8	タテハケ	淡白黄色、微量の石英・長石・ 褐色粒子、良好	土製品
38	67	100	SB-11	壺形	11.8	—	5.4	内外面 ハケ	淡茶灰色、精織、良好	口縁部が僅かに内湾
38	68	97	SB-11	鉢形	18	—	—	ハケ、不明	淡茶灰色、僅かに石英混じる が精織、良好	
38	69	98	SB-11	鉢形	17.6	—	7.5	内外面 ハケ	淡黄茶色、精織、良好	口唇部平滑
38	70	96	SB-11	高坏	22.8	—	—	不明、ハケ	淡褐色、僅かに石英・褐色粒子 混じるが精織、良好	坏部内底ハケは円状 に調整
38	71	99	SB-11	高坏	—	10.4	—	内外面 ハケ	淡茶褐色、僅かに石英粒子混 じるが精織、良好	
39	78	102	SB-12	手づくね	—	—	—	内外面 ナデ (又は指押さえ)	淡白茶色、石英・片岩粒子、良好	ミニチュア土器
39	79	101	SB-12	高坏	—	10.3	—	不明、ハケ	濃茶褐色、僅かに石英粒子含 む、良好	脚部上半に面取り
39	80	104	SB-13	壺形	—	—	—	内外面 不明	淡黄茶色、石英・片岩粒子多量、 良好	僅かに平底を残す
39	81	103	SB-13	高坏	13.3	—	—	内外面 ハケ	淡黄茶色、石英・長石粒含む、 良好	
39	85	116	ST-001	高坏	—	—	—	ヘラ・ハケ、ハケ?	淡茶褐色、褐色粒子含むが 精織、良好	面取り
39	86	109 ST-002内 110 カラン	瓶形壺	—	7.1	—	—	タタキ後ヘラ削り、 回転横ナデ	暗灰色～淡赤褐色、精織で 黒ゴマ状の粒子混じる、良好	須恵器。 胎土は淡赤褐色

辻の西遺跡第3次調査 出土石器観察表

押図	掲載 番号	実測 番号	出土 遺構	種 別	材 質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量	備 考
35	18	1	SB-02	砥 石	砂 岩	8.3	4.4	4.2	200	
35	19	20	SB-02	—	雲母片岩	26.8	12	3.5	1,500	3面に使用痕。表面に鉄錆付着
37	40	21	SB-04	石錐?	粘板岩?	5.2	2.8	1	20	
37	41	13	SB-04	砥 石	雲母片岩	22.6	8.2	7.5	2,410	2面に使用痕
37	42	11	SB-06	石包丁未成品	緑色片岩	14.9	8.4	1.9	325	
37	43	2	SB-06	砥 石	砂 岩	8.2	3.4	2	60	5面に使用痕。白色で目が精緻
37	52	4	SB-07	砥 石	砂 岩	20.2	8.5	7.4	1,350	4面に使用痕。目粗く石器用?
38	62	10	SB-08	板石状石製品	雲母片岩	14.9	13.7	1.7	520	
38	63	7	SB-08	すり石	—	9.7	8.8	4.7	475	
38	64	8	SB-08	砥 石	砂 岩	15.6	11.1	4	800	鉄錆の多量付着有り
38	72	16	SB-11	円盤状石製品	雲母片岩	5	2.9	0.5	15	屋内土壌出土
38	73	17	SB-11	#	緑色片岩	5.3	3.3	0.7	20	#
38	74	18	SB-11	#	雲母片岩	7.2	5.4	1	60	#
38	75	14	SB-11	#	雲母片岩	6.5	5.3	0.7	40	#、使用痕有り
38	76	19	SB-11	#	雲母片岩	7.4	5.9	1	65	#
38	77	15	SB-11	#	雲母片岩	7.4	6.1	1.1	65	#
39	82	12	SB-13	石包丁未成品	緑色片岩	—	—	0.8	60	1/2を欠損
39	83	6	SB-13	砥 石	泥岩?	11.8	5.9	3.5	215	鉄錆の多量付着有り
39	84	23	SX-02	黒曜石母岩	黒曜石	11	9.6	8.5	910	

V まとめ

辻の西遺跡が所在する八女台地（通称：長峰丘陵）には筑紫君の奥津城とも言える大型前方後円墳の他に、九山塚古墳や茶臼塚古墳などの大型円墳、針崎古墳群に見られる小型前方後円墳と後期群集墳の共存等、多種多様な古墳文化が開花していた。

吉田地区や宅間田地区における本格的な古墳の登場は6世紀中頃を待たねばならないが、それ以前においても台地上での造墓、または、集落の形成は行われていたようである。

当遺跡の西に隣接する福島高校遺跡からは弥生時代中期の甕棺墓14基と箱式石棺墓2基が発見されており、江戸時代に出土していたと推定される12・3口の銅矛発見地である「八女市吉田野間」は、小字名の整合性から当遺跡の南側斜面下にその位置が推定でき、その東側一帯には宅間田石棺群を含む宅間田遺跡や弥生時代後期を中心とした竪穴式住居35軒が出土した東松山遺跡が展開している。

この銅矛群は、現在その所在が不明となっており現品を確認する事は出来ないが、一度に大量に発見されている事などから、集落共同体内における祭祀形態の変化に伴う埋納と考えられ、弥生時代末期前後に土中に埋められたものと考えられる。

弥生時代後期に入ると八女市内の弥生集落に大きな変化が見てとれるようになり、それまで一般的に平野の微高地に形成されていた集落が台地上に营造地域を広げ始めて来る。また、これに呼応するかのように甕棺墓や石棺墓、土壙墓のように在地色豊かだった墓制にも変化が現れ、西原遺跡や熊野遺跡のように甕棺・石棺を中心とした大規模な墓域を凌駕するように畿内地域が発祥とされる方形周溝墓が楔を打ち込むように築造される。

辻の西遺跡第1次・2次調査の結果と考え合わせても本遺跡も例外ではなく、在地色の強い甕棺・土壙墓を中心とした墓域内に、突如大小様々な方形周溝墓が築造されている。また、完全な変化ではないが出土する土器群も畿内系の土器を模倣したのと考えられるものもある。しかし、その変化は比較的緩やかなものと考えられ、方形周溝墓の主体部などは伝統的な甕棺墓や石棺墓であり、方形周溝墓の造墓活動に関与したと考えられる周囲に点在する竪穴式住居の構造や屋内土壇の在り方を観察すると、筑後地方特有の施設を保持しているものもあり、その変化は急激なものではなかった事を示唆している。

ただ、先述した銅矛埋納のような本来集落構成員のシンボルであるはずの祭器を事実上放棄するような行為があったことも事実であり、当該地域も着実に多地域の影響を受けつつある時期にさしかかっていたものと想像される。

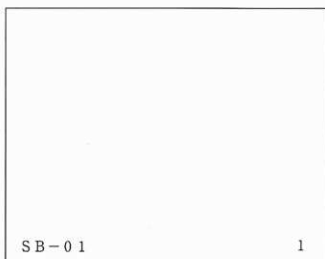
辻の西遺跡第3次調査において出土した土器観察から、集落が形成された時期は弥生時代終末から古墳時代初頭頃が中心で、方形周溝墓の築造時期は古墳時代前期前葉頃と考えられ、一部は重複しているものと思われる。しかし、古墳時代前期中頃になると造墓、及び、集落形成も見られず、名実共に空白期を迎える。

当該地域に再び活気が戻るのは、冒頭で記したように古墳時代後期中頃まで待たねばならない。

PLATES

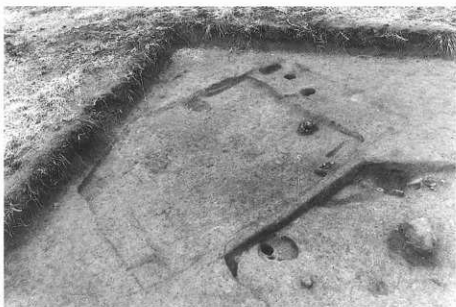
凡例

出土遺物に関する記載は、以下の要領となっている。



(出土遺構番号)

(掲載番号)



1 SB-01全景



2 SB-02全景



3 SB-03全景



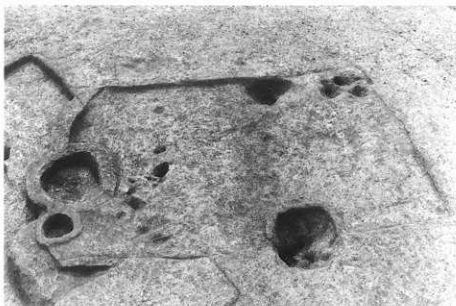
1 SB-03 西側柱穴断面



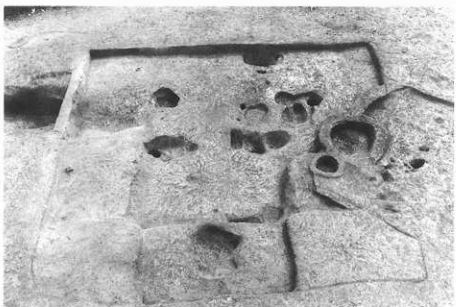
2 SB-04 全景



3 SB-04 土層断面



1 SB-05全景



2 SB-06全景



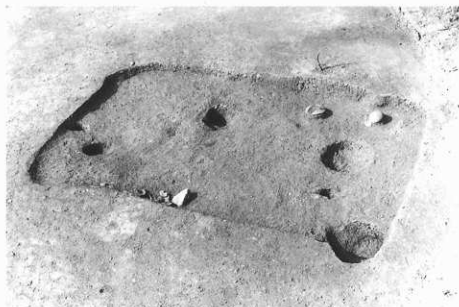
3 SB-07全景



1 SB-08全景



2 SB-08遺物出土状況



3 SB-11全景



1 SB-11出土遺物状況



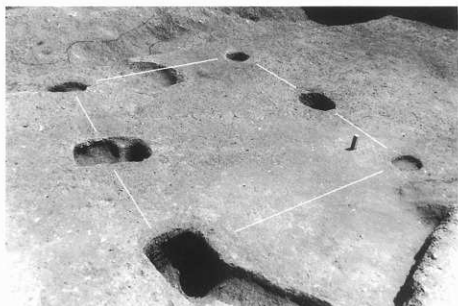
2 SB-12全景



3 SB-13全景



1 SB-09全景



2 SB-10全景



3 方形周溝墓群全景（西より）



1 ST-001 No.1 土層断面



2 ST-001
No.2・3 土層断面



3 ST-001 No.3 土層断面



1 ST-001 No. 4 土層断面



2 ST-001 No. 5 土層断面



3 ST-001 内石蓋土墳墓



1 石蓋土墳墓 石蓋除去後



2 ST-001内木蓋土墳墓



3 ST-002・003
006全景 (西より)



1 ST-003主体部 (墓棺)



2 ST-006主体部 (石棺)



3 SX-01土層断面

1 SX-01 半截完掘狀況

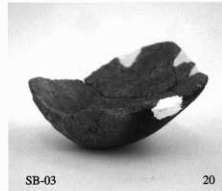
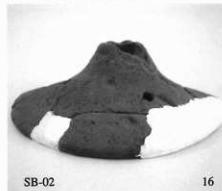
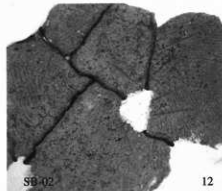
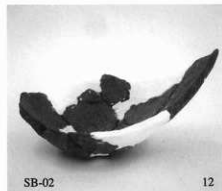
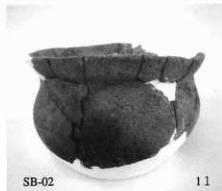
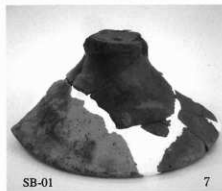
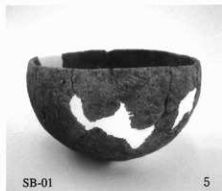
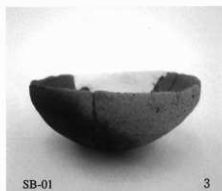


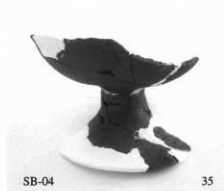
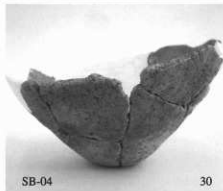
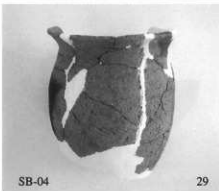
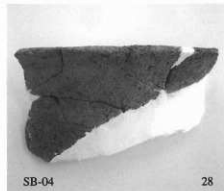
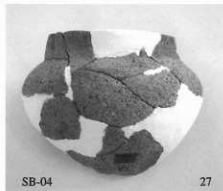
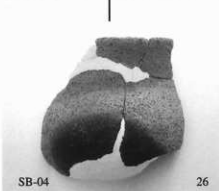
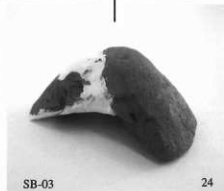
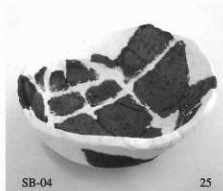
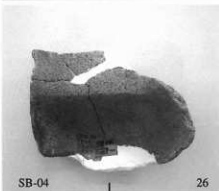
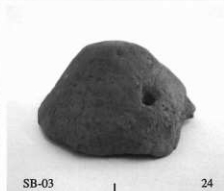
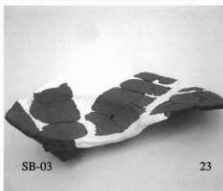
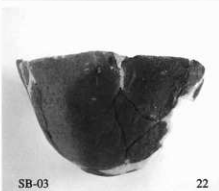
2 SX-01 高被熱部近景

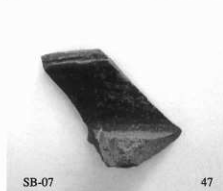
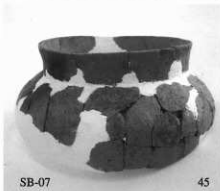
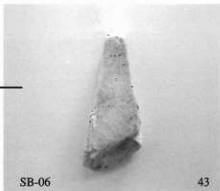
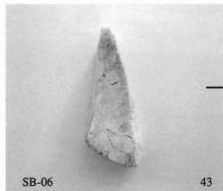
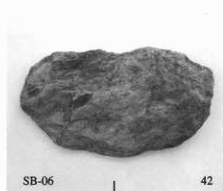
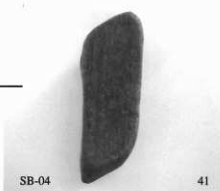
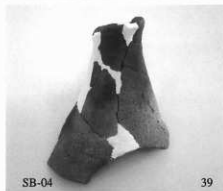
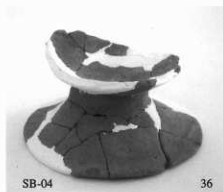


3 SX-02 出土黑曜石









P L 15



SB-07

48



SB-07

49



SB-07

50



SB-07

52



SB-07

52



SB-08

53



SB-08

55



SB-08

57



SB-08

58



SB-08

59



SB-08

62



SB-08

64



SB-08

65



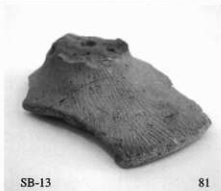
SB-08

66



SB-11

67



報告書抄録

ふりがな	つじのしにいせき						
書名	辻の西遺跡(第3次調査)						
副書名	福岡県八女市吉田字辻所在の発掘調査報告書						
巻次	第2冊分						
シリーズ名	八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第80集						
編著者名	大塚恵治						
編集機関	八女市教育委員会						
所在地	834-8585 福岡県八女市本町647 TEL 0943-23-1982						
発行年月日	西暦 2007年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
つじのし 辻の西遺跡 (第3次調査)	ふくおかけん 福岡県 やふし しまに あび つじ 八女市吉田字辻	402109	33°13'42"	130°33'49"	2005.10.18 ～2006.03.30	約2,584m ²	施設利用 者の駐車 場造成
所収遺跡名	種別	種な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
辻の西遺跡 (第3次調査)	集落跡 墳墓跡	弥生時代 古墳時代	竪穴式住居 掘立柱建物 土塼、溝 方形周溝墓		弥生式土器 土師器 須恵器 石器		

辻の西遺跡(第3次調査)

八女市文化財調査報告書
第80集

平成19年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647
印刷 (資) 東兄弟印刷所
八女市折持院563